

資料

青年の自己概念形成と社会的比較

——日本人大学生にみられる特徴——

高 田 利 武¹SOCIAL COMPARISON AND FORMATION OF SELF-CONCEPT IN ADOLESCENT
— Some Findings About Japanese College Students —

Toshitake TAKATA

In order to clarify the dominant mode of self-knowledge formation of Japanese college students, their favorite self-evaluative standards were compared with those of Japanese middle ages (Study I) and with American students (Study II). Their individual difference were also examined (Study III). Respondents were asked to evaluate twelve aspects of their self-concept. They were then required to indicate what standards they used to evaluate themselves: (a) social comparison with similar others, (b) social comparison with dissimilar others, and (c) temporal comparison. In Study III, respondents also evaluated to what extent they agreed with an independent or interdependent construal of self (Markus & Kitayama, 1991). It was found that Japanese students used social comparison with similar others as standards more than middle ages (Study I) or American students (Study II), especially on the social and physical aspects of self-concept. The tendency that these aspects formed an undifferentiated cluster regarding the self-evaluative standard was dominant in Japanese students. Furthermore, these characteristics were found remarkably higher among those who strongly agreed with the interdependent construal of self (Study III).

Key words: social comparison, self-concept, independent and interdependent construal of self, adolescence, cross-cultural study.

青年期は一般に自己再構成の時期とされる。自己概念の内容や構造あるいは自己評価が青年期に変化することを実証した研究は数多い(例えば, Montemayor & Eisen, 1977; Marsh, 1989; 山田, 1989)。他方, 自己概念は何らかの経路を経て形作られるものであるから, 青年期に生じる自己概念の内容や構造の変化の背景には, 自己概念が形成される機制自体に変化があると思われる。しかしながら, 青年期に特有な自己概念の形成機制に関しては, これまで実証的研究は殆どなされていない。

従来, 自己概念が形成される過程について, いくつかの機制が指摘されている。例えば, Mettee & Smith (1977) は自己認識の源泉として, (1)社会的比較(行為や特性についての自分と他者との比較; Festinger, 1954), (2)社会的フィードバック(象徴的交互作用を通じた他者の視点や評価の取り入れ; Cooley, 1902; Mead, 1934), (3)自己観察(自分の行為やその決定要因の観察; Bem, 1972; Duval & Wickland, 1972), (4)非社会的環境からのフィードバック(自分の行為が環境にもたらす効果の経験; White, 1959)をあげている。

これらのうち, 本研究では社会的比較を取りあげ, それが青年期の自己概念形成に果たす役割を検討する。

¹ 奈良大学 (Department of Social Psychology, Nara University)

これに関する従来の実証的研究は乏しいが、Schoeneman (1981) は、青年(大学生)を対象に社会的比較、社会的フィードバック、自己観察のいずれが自己概念形成への影響が大きいかを調べている。自分の特性を知るのによく用いる源泉はどれかを尋ねたところ、自己観察が最も用いられていることが明らかであった。しかしながら、社会的比較は幼児や児童では殆ど使われていないのに対して (Schoeneman *et al.*, 1983), 大学生ではある程度利用されていた。したがって、社会的比較が自己概念形成に果たす役割は青年期に相対的に高まると思われる。

さらに、Suls & Mullen (1982) は自己概念の形成における社会的比較の重要性に関する生涯発達モデルを提唱している。即ち、自分の能力や傾性を自己評価する基準として、(1)自分と類似した特性をもった他者との社会的比較、(2)自分とは類似していない他者との社会的比較、(3)現在の自分を過去の自分と比較する継続的比較 (Albert, 1977) の3つを取り上げ、これらの基準の相対的重要性の発達の変化について論じている。

それによれば、類似した他者との社会的比較を通じて自己評価が行われる傾向は、8・9歳から40歳前後にかけて著しいが、殊に青年期に極大に達すると言う。それは、認知能力の発達によって類似した他者との比較が正確な自己評価をする上で有効であることを理解するようになること、および、同輩集団成員との相互交渉の機会が増大することによる。自分の能力を評価するにあたって、年齢が類似した他者を基準とする者の割合が成人よりも青年に多いことを示した知見 (Suls, 1986; 高田, 1991) は、このモデルを部分的に実証している。

Suls & Mullen のモデルは自己概念を構成する一部側面の自己評価を扱ったものではあるが、青年期の自己概念の形成機制としての社会的比較の重要性を示唆すると言える。即ち、社会的比較を通じた自己概念の形成が促進される条件として、青年期を中心とする発達の要因が第一に考えられる。他方、青年期の自己概念形成における社会的比較の利用をさらに拡大する条件として、自己概念の内容に係わる要因と文化的要因とをあげることができると思われる。

前者について、自己概念を構成する内容は多岐にわたることは以前から指摘されている。例えば山本・松井・山成 (1982) は、大学生の自己概念は“知性”“社交”等11の自己認知の側面から構成されていることを示している。これらの諸側面のうち、他者との相対的位置関係に規定される社会的側面や、自他の眼に顕現する

身体的側面では、社会的比較によって自己概念が形作られる傾向が強いことが予想される (高田, 1991)。

後者の文化的要因について、異なった文化における自己の様態を同一の枠組みで捉える理論的試みの1つとして、Markus & Kitayama (1991) は独立的自己理解 (independent construal of self) と相互依存的自己理解 (interdependent construal of self) の区分を提唱している。前者は、個人はそれぞれ他者から分離しており、それ故、自己は自律的で独立しているため、個人は他者から独立し独自性を主張することが必要であるという考えで、欧米文化に多く見られる。後者は、個人は互いに結びついていて個別的ではなく、さまざまな人間関係の一部になりきることが大切であるとする考えで、日本をはじめアジアの文化に多く見られる。同時に、それぞれの文化内においても2つの自己理解のいずれかが優勢である程度には個人差があることも指摘されている。

自他の区分が曖昧で独立主体としての「個」の意識が弱く、周囲の他者に規定されがちなのが日本人の自己の特徴であるという見解は、さまざまな理論的観点に立つ論者に一致したものであるが (例えば浜口, 1977; 南, 1983), Markus & Kitayama (1991) の見解はそれらを包摂するものと言える。他者との関係性が重要視される相互依存的自己理解が優勢な文化あるいは個人においては、自己概念が形成されるにあたり、他者との社会的な関係に基づく社会的比較に依存する程度が相対的に高いことが考えられる。

これまでに述べてきたことから、社会的比較を通じた青年期の自己概念形成に関して、以下の諸点が予想される。(1)社会的比較を通じて自己を捉えようとする傾向は成人期に比べ青年期に著しいことが考えられるが、それはさらに、(2)自己概念の社会的あるいは身体的側面が多い、(3)日本文化に顕著である、(4)日本人の中でも相互依存的自己理解が優勢な者に目立つ。なお、基本的に児童期から成人期への過渡期である青年期の年齢範囲を明確に規定するのは困難であるが (高田・丹野・渡辺, 1987), ここでは12歳前後からの約10年間を青年期として捉える一般的見解に従い、その後期にあたる大学生に焦点をあてる。したがって、上記の予測を日本人大学生を主な対象とした3つの質問紙調査によって検討することが本研究の目的である。即ち、研究Iでは(1)(2)を、研究IIでは(3)を、研究IIIでは(4)をそれぞれ扱う。

研究 I

目的 自己概念を構成するさまざまな側面を大学生が評価する際、年齢が類似した同輩と比較して行う程度を検討する。自己評価の基準として、(1)年齢が類似した他者との社会的比較、(2)類似していない他者との社会的比較、(3)現在の自分と過去の自分との継時的比較、の3種に大別し、これらの基準が利用される程度における大学生と各年齢層の成人との相違、および、自己概念の各側面による相違を探索。なお、類似性の次元として年齢を取りあげたのは、社会的比較に際して年齢の類似性が相対的に重視されるという知見(高田, 1985)、および、青年期には自己にとっての同輩の重要性が顕著に増大するという指摘(Rosenberg, 1979; Ausbel, Montemayor & Svojiar, 1977)に基づく。

方法 1. 調査対象者 (1)大学生(160(男88・女72)名, 平均年齢20.4歳), (2)成人30歳代(158(男79・女79)名, 平均年齢34.1歳), (3)成人40歳代(121(男50・女71)名, 平均年齢44.3歳), (4)成人50歳代(132(男66・女66)名, 平均年齢55.5歳)の4群を対象者とした。(1)は地方国立大学生, (2)~(4)は地方公務員と有職婦人・主婦であり, 1987年6月に講義時間, 研修, 家庭教育学級の席上で一斉に実施した。

2. 質問紙 質問紙の基本的構成はSuls(1986)に準拠した。以下の2部から構成され, 回答者はこの順に回答する。(1)自己概念の各側面での自己評価: 24項目について5段階の自己評定を求める。これらの項目は, 山本他(1982)による自己認知の11側面(TABLE 2参照)のそれぞれを各2項目で測定するための22項目と, 社会的比較過程理論で従来論じられている一般的能力に関する2項目から成る。(2)自己評価の基準: 24項目のそれぞれについて, 以下の基準のどれと比べて自己評価を行ったか選択を求める。即ち, ①自分と同年齢の他者, ②自分より多少若い他者, ③自分より多少年長の他者, ④自分よりかなり若い他者, ⑤自分よりかなり年長の他者, ⑥少し以前の自分自身, ⑦かなり以前の自分自身, の7基準である。これらのうち①~⑤は社会的比較, ⑥⑦は継時的比較を指す。社会的比較のうち①は年齢が類似した他者との比較, ②~⑤は非類似な他者との比較であるが, このうち②③は非類似の程度が低く, ④⑤はそれが高い他者である。継時的比較のうち⑥は類似した過去, ⑦は非類似な過去との比較である²。

結果と考察 1. 各評価基準の選択率 上述した①~⑦の各基準が用いられる程度を全体的に検討するた

め, 24の自己評価項目中いくつかの項目でそれぞれの基準が用いられたかについて, 各調査対象者群毎にその平均値を算出した結果がTABLE 1である。4(対象者群)×2(性別)×7(評価基準)の分散分析(評価基準は繰り返し要因)を実施したところ³, 評価基準の有意な主効果が見られた($F(6,3378)=1196.76$ $p<.0001$)。Newman-Keuls検定の結果, 自分と同年齢の他者との比較と他の基準のいずれとの間にも有意差($p<.0001$)があり, 各対象者・性別を通じて用いられることが最も多い。

一方, 対象者群×評価基準の交互作用が有意で($F(18,3378)=16.69$ $p<.0001$), 対象者群の如何によって用いられた評価基準の頻度は異なる。年齢の類似した他者との社会的比較(①)に関しては, Newman-Keuls検定によると大学生といずれの年齢の成人群との間にも有意な差($p<.01$)があるのに対して, 成人各年代群間には有意差はない。非類似他者との社会的比較については, ②~⑤のいずれにおいても成人各年代は大学生より有意に多い(ともに $p<.05$)。継時的比較については, ⑥は対象者群間に有意差はないが, ⑦は成人各年代は大学生より有意に多い($p<.05$)。

なお, 性別×評価基準の有意な交互作用があり($F(6,3378)=9.85$ $p<.0001$), 類似した他者との比較は男子, 継時的比較は女子に有意に多く見られた(ともに $p<.01$)。

2. 自己概念の側面による相違 類似他者との社会的比較は青年に相対的に多い, という全体的傾向は, 自己概念を構成する各側面によって異なるか否かを検討するため, 各対象者群が類似した他者との社会的比較を用いた割合を, 自己概念の側面毎に求めた(TABLE 2)。対象者群×性別×頻度の飽和モデルによる対数線形分析を各側面毎に実施したところ, 生き方を除くすべての側面において, 対象者群×頻度の有意な交互作用があり, 成人群では大学生より選択が少なく, 年代が高いほどそれが著しい傾向がある($\lambda=-.167\sim-.369$ $p<.05\sim.001$)。なお, 性別×頻度の有意な交互作用が知性, 性的能力, 趣味特技, 容貌の各側面で見られ($\lambda=-.122\sim-.185$ $p<.01\sim.05$), 類似した他者との比較は男性に多い。

一方, それぞれの対象者群内での類似他者との社会

² 自己評価の基準と自己概念の側面について先行研究(Suls, 1986; 山本他, 1982)に準拠したのは, 必ずしも標準的研究手法が確立されていない研究領域においては, 同一の概念と方法を用いた場合のみ先行研究との比較が可能になるという指摘(林・白井・高田, 1981)に立脚したためである。

³ 自己概念のあり方には性差が見られることも考えられるため, 以下のすべての結果の処理において性別の要因を加えて分析した。

的比較選択頻度の側面による相違を検討するために、Cochran の Q 検定を対象者群毎に実施した。その結果、いずれの対象者群においても有意差が見られ($Q=$

$67.46 \sim 27.82$, $df=11$, $p<.0001 \sim .01$), 対象者群により多少の相違はあるが、概して社交, 経済力, 社会的背景, 容貌, 運動能力の側面に多い傾向がある。

TABLE 1 各評価基準の平均選択数^{a)b)c)}

対象者	自 己 評 価 の 基 準						
	① 同年齢の 他 者	② 多少若い 他 者	③ 多少年長 の他者	④ かなり 若い他者	⑤ かなり年 長の他者	⑥ 少し以前 の自分	⑦ かなり以 前の自分
大学生 (n=160)	19.4 ^b (4.5)	0.9 ^a (3.3)	2.3 ^a (3.7)	0.2 ^a (1.6)	0.4 ^a (1.3)	1.4 ^a (2.6)	0.5 ^a (1.1)
成人30代 (n=158)	14.2 ^a (5.5)	2.8 ^b (4.0)	3.6 ^b (4.4)	1.0 ^b (2.7)	1.1 ^b (2.4)	2.5 ^a (4.5)	1.1 ^b (2.1)
成人40代 (n=121)	13.9 ^a (5.4)	2.4 ^b (3.0)	3.0 ^b (4.6)	1.1 ^b (2.4)	1.2 ^b (2.2)	2.1 ^a (4.2)	1.1 ^b (2.2)
成人50代 (n=132)	13.8 ^a (5.3)	2.0 ^b (2.4)	2.1 ^b (3.0)	0.9 ^b (1.9)	0.7 ^b (1.2)	1.6 ^a (3.2)	1.4 ^b (2.9)

a) 各基準を重複選択した者があるため、平均頻度の合計値は24以上となっている。

b) 各基準内で、異なったアルファベットのついた数値間には Newman-Keuls 検定で有意差がある。

c) () 内は標準偏差。

TABLE 2 自己概念の側面毎の類似他者の選択率

	真面目さ	優しさ	知 性	性的能力	生き方	趣味特技	社 交	経済力	社会背景	容 貌	運動能力	能力一般
大学生	85.6	86.3	86.9	85.6	76.3	86.9	93.1	95.6	94.4	93.1	94.4	88.8
成人30代	66.5	52.5**	67.7	65.8*	71.5	72.8	71.5*	76.0*	79.1	74.1	76.6	72.2
成人40代	64.5*	52.1**	59.5**	69.4	64.5	71.1	71.1*	73.6**	76.9	68.6*	67.8***	71.1*
成人50代	65.9	55.3*	67.4	63.6*	68.2	66.7**	72.7*	72.7**	68.9***	65.9***	72.0*	73.5

a) * ** *** 対数線形分析の結果、大学生の平均に比べてそれぞれ $p<.05$, $.01$, $.001$ で少ないことを示す。

これらの結果に関して、(1)年齢の類似した他者との比較が大学生に多いこと、(2)類似他者との社会的比較は自己概念の殆どすべての側面で見られる一方、社会的側面(社交, 経済力, 社会的背景)と外面的・客観的側面(容貌, 運動能力)で殊に顕著であること、の2点は予測(1)(2)および先行研究(高田, 1991)と一致する。しかし、類似他者との社会的比較の頻度が成人の各年代間で有意差のない点は、Suls (1986) の知見とは異なるものである。

3. 類似他者との比較から見た自己概念の構造 類似他者との社会的比較という自己評価の基準から見た場合、自己概念はどのような構造をなしているか、また、そこに大学生と成人の相違が見られるかを検討するために、類似した他者との比較が選択された頻度に基づいて自己概念の側面のグループ分けを試みた。

11側面の各々の組み合わせについて同時選択頻度のク

ロス表を作成し、その γ 係数を側面間の類似度の指標としてクラスター分析(最近隣法)を大学生と成人に対して行った。その結果、得られた樹状図を Fig. 1 に示す⁴。大学生では経済力, 運動能力, 社交, 容貌, 社会的背景の5側面が極めて近い関係にあるのに対して、成人ではそれら諸側面に関連は見られるものの青年期ほどには関係は強くなり、各側面は相対的に独立している。即ち、年齢の類似した他者との比較を通じた自己認知から見た場合、自己概念の社会的あるいは外面的側面が内容的に区別されていないことが、青年の特徴として示唆されよう。

⁴ 成人30・40・50代の結果はほぼ同一であったため、成人各年代を込みにして処理した結果を掲げた。また他に最遠隣法, 群間平均距離法, 群内平均距離法の各手法を試みたが、結果は概ね同様であった。

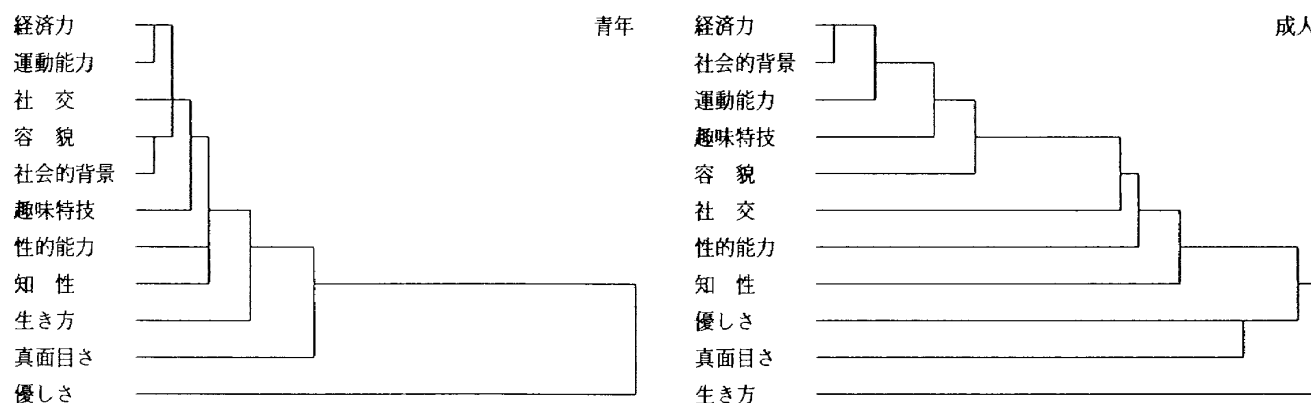


FIG. 1 類似他者との比較に基づく自己概念各側面のクラスター分析

研究 II

目的 類似他者との社会的比較が優勢であることは、青年期に特有な反応というだけでなく、日本文化における自己の様態が加味されて生じている可能性を検討することが研究IIの目的である。具体的には、日本人とアメリカ人大学生を対象に研究Iと同一の調査を行い、自己評価に際して同輩と社会的比較が用いられる程度を比較文化的に吟味する。

方法 1. 調査対象者 (1)日本人大学生(首都圏の私立大学生149(男76・女73)名,平均年齢20.4歳), (2)アメリカ人大学生(西海岸の州立大学生180(男94・女86)名,平均年齢20.6歳)の2群を対象者とした。(1)は1988年11月,(2)は1988年5月に,それぞれ講義時間中に担当教員によって一斉に実施された。

2. 質問紙 日本人大学生の場合は研究Iと同一である。アメリカ人学生に対しては,日本人用質問紙の英訳版を用いた。英語版作成にあたっては,質問の意味内容が日米間で同一になるよう検討が加えられた。

結果と考察 1. 各評価基準の選択率 自己評価の各基準が用いられた頻度について,各調査対象者群毎にその平均値を示したのがTABLE3である。2 (対象者群)×2 (性別)×7 (評価基準:繰り返し要因)分散分析によれば,評価基準の主効果が有意であった($F(6, 1950)=1391.58$ $p<.0001$)。同年齢の他者との比較は,他の基準のいずれとの間にも Newman-Keuls 検定で有意差があり ($p<.0001$), 選択が一般に最も多い。

また,対象者群×評価基準の交互作用も有意であり ($F(6, 1950)=13.33$ $p<.0001$), 日本人大学生とアメリカ人大学生とでは評価基準の選択頻度は異なる。即ち, Newman-Keuls 検定によれば,同年齢他者との比較は日本人,異なった他者との比較(②~⑤)はアメリカ人にそれぞれ有意に多い ($p<.05$)。継時的比較では,

⑥のみアメリカ人が有意に多い ($p<.05$)。この結果は,類似他者との社会的比較は日本人により優勢であるという予測(3)を支持するとともに,アメリカ人大学生は日本人大学生に比べて,自己評価にあたり相対的に多様な基準を用いていることを示唆すると言えよう。

2. 自己概念の側面による相違 類似した他者との社会的比較が用いられた割合を,各側面毎に示したのがTABLE4である。対象者群×性別×頻度の飽和モデルによる対数線形分析を各側面毎に実施した結果,評価基準の主効果がどの側面でもあり ($\lambda=.672\sim1.318$ $p<.0001$), 類似した他者との比較は日米を通じて有意に多く選択されている。また,真面目さ,性的能力,社交,経済力,社会的背景,容貌の各側面に対象群×頻度の交互作用が認められた ($\lambda=.145\sim.478$ $p<.05\sim.001$)。これらの側面では,日本人はアメリカ人に比べて有意に選択が多い。

一方,各対象者毎に実施した Cochran のQ検定はいずれも有意で,類似他者との社会的比較の選択頻度の自己概念側面による相違について,以下の傾向が認められる。即ち,日本人では社交,経済力,社会的背景,容貌,運動能力に特に多い ($Q=65.45$ $df=11$ $p<.0001$)。これに対して,アメリカ人の場合は真面目さ,知性,性的能力,生き方で相対的に少ない ($Q=20.24$ $df=11$ $p<.05$)。

即ち,日本人大学生は自己概念の社会的側面(社交等)と外面的側面(容貌等)で,年齢の類似した他者との社会的比較の頻度が極めて高い。これに対してアメリカ人大学生は,それらの側面において類似他者との比較に依存する傾向はさほど高くはなく,比較頻度の側面間の差は日本人ほどには顕著でないと言える。

3. 類似他者との比較から見た自己概念の構造 研究Iと同様の方法を用い,対象者毎にクラスター分析(最近隣法)を行った結果がFIG.2である。日本人では,経

済力、運動能力、社交、容貌、社会的背景の5側面と趣味特技が近い関係にあるという、研究Ⅰの大学生の結果とほぼ同じ結果が示されている。他方、アメリカ

人では経済力と社会的背景、および生き方と知性が近い関係にある以外は、各々の側面は比較的独立している。

TABLE 3 各評価基準の平均選択数^{a)b)c)}

対象者	自 己 評 価 の 基 準						
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
	同年齢の 他 者	多少若い 他 者	多少年長 の他者	かなり 若い他者	かなり年 長の他者	少し以前 の自分	かなり以 前の自分
日本人 (n=159)	19.2 ^a (3.8)	0.6 ^a (2.2)	1.5 ^a (1.9)	0.2 ^a (1.3)	0.4 ^a (1.1)	1.5 ^a (2.7)	0.8 (1.6)
アメリカ人 (n=180)	16.9 ^a (4.7)	1.3 ^b (3.4)	3.0 ^b (3.5)	0.6 ^b (2.6)	1.6 ^b (3.0)	2.2 ^b (3.8)	0.8 (2.2)

a) 各基準を重複選択した者があるため、平均頻度の合計値は24以上となっている。

b) 各基準内で、異なったアルファベットのついた数値間にはNewman-Keuls検定で有意差がある。

c) () 内は標準偏差。

TABLE 4 自己概念の側面毎の類似他者の選択率

	真面目さ	優しさ	知性	性的能力	生き方	趣味特技	社交	経済力	社会背景	容貌	運動能力	能力一般
日本人	85.2*	85.9	85.2	87.3*	77.9	82.6	92.6*	97.3***	94.6***	91.3*	92.6	88.6
アメリカ人	75.6	86.1	78.9	79.4	80.6	83.9	84.4	83.9	83.3	84.4	87.8	83.3

a) * ** *** 対数線形分析の結果、アメリカ人の平均よりそれぞれ $p < .05, .01, .001$ で多いことを示す。

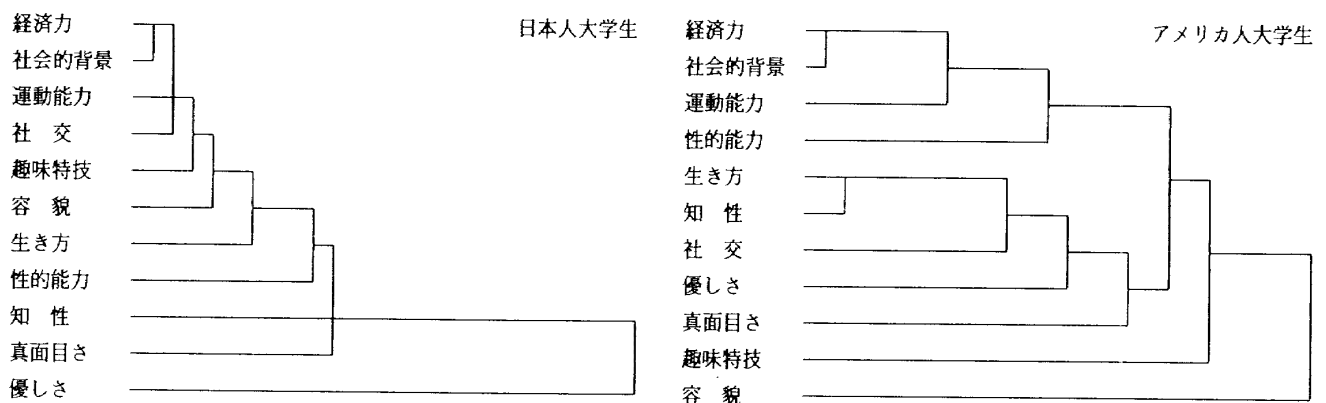


FIG. 2 類似他者との比較に基づく自己概念各側面のクラスター分析

研究Ⅲ

目的 日本人大学生の中でも相互依存的自己理解が優勢な者は、類似した他者との社会的比較を自己評価に多用する、という予測をここでは検討する。相互依存的自己理解と独立的自己理解の程度を測定する尺度を作成した上、それぞれの程度と社会的比較との関連を吟味する。

方法 1. 調査対象者 地方国立大学生202 (男子

99・女103)名、平均年歳20.2歳。

2. 質問紙 (1)相互依存-独立的自己理解尺度：相互依存的・独立的各20項目、合計40項目からなる。これらの項目は、Markus & Kitayama (1991) の記述と、日本における相互依存的自己理解の様態として Markus & Kitayama が引用する土居 (1966)、浜口 (1977) の記述に基づいて作成し、7段階の自己評定を求めた。TABLE 5 に項目の例を示す。(2)社会的比較尺度：研究Ⅰ・Ⅱと同一のものである。2種の質問紙は2週間を

隔てて、1991年11月に講義時間中に一斉に実施された。

結果と考察 1.相互依存的・独立的自己理解の構造
まず相互依存的・独立的自己各20項目毎に、項目全体の平均値によってそれぞれ調査対象者を上位群と下位群に分割し、各項目の平均値の群間t検定を行うことによって項目分析を実施した。その結果、すべての項目で有意差が見られたため、全40項目の評定値に対

して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行ったところ、TABLE 5 に示す8因子解を得た。これらのうち、第2・3・4・7因子は相互依存的、第1・5・6・8因子は独立的自己理解に属すると解釈される。即ち、相互依存的・独立的自己理解の双方とも、いくつかの下位要因から構成されていることが示唆される⁵。

2.社会的比較との関連 相互依存的および独立的自

TABLE 5 相互依存－独立的自己理解尺度の因子分析

因 子	項 目	因子負荷量
1.独断性 (7.43 18.6%)	自分の信じる場所を守り通す	.718
	他者が自分の考えを何と思おうと気にしない	.613
	絶対に自分の判断を変えない	.539
	自分で考えたのが最良の決断である	.532
	善悪は自分の考えで決まる	.463
	自分一人で物事の決断をする	.452
	常に自分の意見を持つようにしている	.389
2.他者・状況への順応 (3.58 9.0%)	相手や状況で態度や行動を変える	.669
	どう感じるかは他者や状況によって変わる	.511
	どう振舞うかは他者や状況によって変わる	.495
	所属集団の仲間との意見の対立を避ける	.469
	他者の同意が得られなければ考えを変える	.458
	意見が対立した時、相手の意見を受け入れる	.401
	他者の好感を得るために、意見ややり方を変えたりはしない	-.469
3.評価懸念 (2.53 6.3%)	他者の視線が気になる	.881
	他者の評価を気にする	.761
	他者との地位や相対関係が気になる	.475
	迷いやためらいを感じ、実行に移せない	.450
4.集団への依存 (1.79 4.5%)	個人では控え目だが、集団だと積極的になる	.557
	単独行動より集団行動のほうが好きだ	.570
	見知らぬ土地へ行くと気ままな振舞いをする	.480
	集団であれば一人ではできないこともやれる	.382
	他人に頼るのは好きではない	-.356
	考えや行動が他人と違っても気にならない	-.389
5.個性の認識・主張 (1.68 4.2%)	いつも自信をもって発言し、行動している	.545
	自分の意見はいつもはっきり言う	.512
	自分はユニークだと思う	.501
	常に自分が何をしたいのか分かっている	.426
	自分の性格を容易に言うことができる	.375
6.利己主義 (1.58 4.0%)	集団のために自分の利益を犠牲にはしない	.563
	仲間の望むように振舞うのが大切とは思わぬ	.390
	関係のない他者に対しては気ままに振舞う	.368
	決断する時、他者への影響をまず考える	-.312
	他者の期待に自然と自分を合わせてしまう	-.358
7.情緒的結合 (1.35 3.4%)	仲間の中で和を維持することは大切だと思う	.612
	家族の一人に起きた問題は、家族全体に関わる問題だと感じる	.591
	人から好かれることは大切である	.467
8.自立性 (1.33 3.3%)	他者の期待により行動や考えを左右されない	.539
	自分は自立していると思う	.496

() 内は固有値および寄与率

己理解各4因子のそれぞれについて、その因子に含まれる質問項目の平均値を調査対象者毎に算出し、下位要因得点とした。つぎに各下位要因得点毎に、その平均値に基づいて調査対象者を上位得点者と下位得点者に分割した。さらに相互依存的・独立的自己理解の双方において、それぞれに含まれる4つの下位要因のうち3つ以上で上位得点者あるいは下位得点者である者を、それぞれ上位者、下位者とした。自己評価の基準として同年齢他者が選択された割合の平均は、相互依存的自己理解上位者 ($n=63$) は85.0%, 下位者 ($n=70$) は75.4%であり、この間には有意差がある ($t(131)=2.33$, $p<.03$)。これは予測(4)と一致する結果である。なお、独立的自己理解の上位者 ($n=38$; 80.5%) と下位者 ($n=57$; 82.4%) 間には有意な差は見られなかった ($t(93)=0.40$)。

3. 自己概念の側面による相違と自己概念の構造 類

TABLE 6 自己概念の側面毎の類似他者の選択率

	真面目さ	優しさ	知性	性的能力	生き方	趣味特技	社交	経済力	社会背景	容貌	運動能力	能力一般
上位者	93.4***	88.5*	85.2	90.03***	88.5*	91.9***	93.4**	98.4	98.4	95.0	91.9*	91.9
下位者	73.2	85.4	80.5	72.5	80.5	80.0	82.5	95.1	95.1	90.2	85.4	90.2

a) * * * * 対数線形分析の結果、下位者の平均よりそれぞれ $p<.05$, $.01$, $.001$ で多いことを示す。

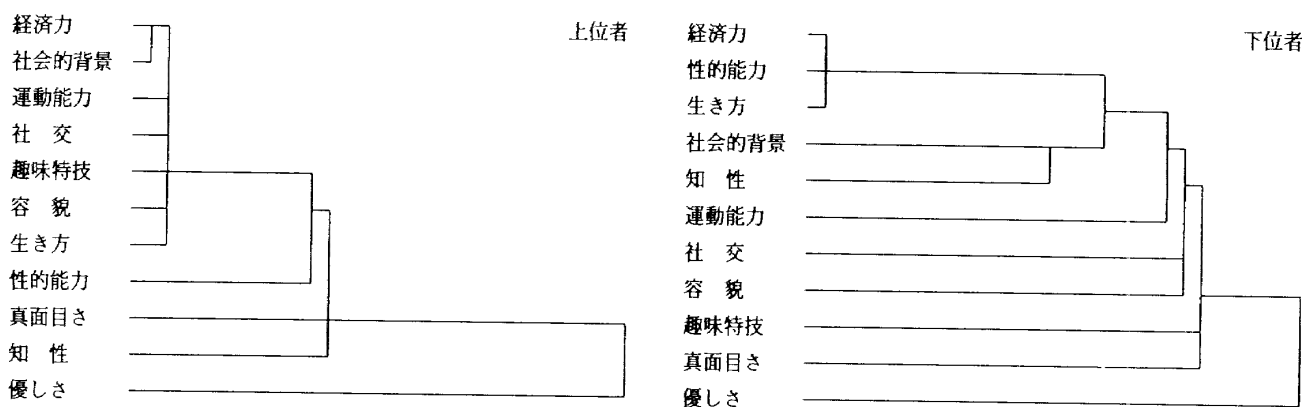


FIG. 3 類似他者との比較に基づく自己概念各側面のクラスター分析

全体的考察

研究 I ~ III を通じ、日本人成人およびアメリカ人大学生と対比した日本人大学生の特徴として、以下の点が明らかにされたと言えよう。(1) 自分自身を評価する際に、年齢の類似した他者 (同輩) との社会的比較を多用する、(2) 自己概念の社会的側面と、外面的・客観的

似他者との社会的比較が選択された割合を、相互依存的自己理解の上位者と下位者毎に示したの TABLE 6 である。対数線形分析によると、自己理解×頻度の交互作用が真面目さ、性的能力、生き方、趣味特技、社交、運動能力の各側面で認められ ($\lambda=.132\sim.487$, $p<.05\sim.001$)、これらの側面では、上位者は下位者より有意に選択が多い。さらに、上位者と下位者に対する研究 I・II と同様のクラスター分析の結果が FIG. 3 である。上位者は、経済力、社会的背景、運動能力、社交、趣味特技、容貌、生き方の側面が比較的近い関係にあるのに対して、下位者は性的能力、経済、生き方が近い以外は各側面が相対的に独立している傾向が見られる。以上の諸結果は、研究 II で見られた日本人大学生の特徴には相互依存的な自己理解が介在していることを示唆する。

側面において、その傾向は顕著である、(3) それらの側面の自己評価において、個々の側面は区別されずいわば未分化に同輩との比較という基準が用いられる傾向がある、(4) 上記諸点は相互依存的自己理解が優勢な者に特に著しい。

このように、青年期の自己概念形成において社会的比較が重要な役割を果たしていることが示唆される。しかしながら本研究の資料は、自己評価の基準さらには自己概念形成の機制として社会的比較と継時的比較

⁵ 詳細については高田 (1992) 参照。

のみを取りあげた点、比較他者の類似性の次元を年齢に限った点、さらに青年後期に限られた点に問題が残されている。そのような限定はあるが、日本人大学生における年齢が類似した他者との社会的比較の顕著さをもたらす要因について、以下のような3つの推論が可能であろう。

第1に、常に他者との関係の中で自己を捉えようとする日本文化における自己の特質、即ち、自己概念の他者規定性をあげることができよう。自己概念の中でも、具体的事実に基づき他者の眼に明瞭な外面的側面や他者との関係により決まる社会的側面での頻度が特に高いこと、また、それら他者の眼差しが特に意識されやすい諸側面は、同輩との比較という点では互いに区別されていないこと、さらに相互依存的自己理解が優勢な者にそれらの傾向がとりわけ著しいことは、この推測を裏づける。このような日本文化に特徴的な自己のあり方が、青年期の自己再構成に際して端的に現れていると考えることは可能であろう。

第2に、日本人大学生はアメリカ人大学生と比べて自己評価が低いことに着目する必要がある。研究IIの資料について、自己概念の11側面と能力一般について、自己評価の調査対象者・性別毎の平均値に対し2(対象者群)×2(性別)分散分析を実施したところ、経済力と運動能力を除くすべての側面において対象者群の主効果が見られ、日本人大学生はアメリカ人大学生よりも自己評価が有意に低かったのである($F(1,325)=217.51 \sim 5.76$ $p<.0001 \sim .01$)⁶。

青年期に見られる自己批判傾向や自己評価の低さは、自己再構成に伴う自己概念の不確実さを反映している(加藤, 1977)。一方、社会的比較過程理論(Festinger, 1954)によれば、自己認知の不確実さを解消するために、類似他者との社会的比較は行われる、とされる。この観点に立てば、日本人大学生の自己評価の低さは自己概念の不確実さに由来し、その不確実さ故に社会的比較が増大する、と解釈することができる。南(1983)は「日本の自我」の特性として自己不確実感を指摘しているが、このように考えれば、青年期の自己再構成の過程において日本人の自己の特質がここでも端的に現れている、と理解されよう。

第3に、Sulsら(1982; 1986)のモデルや知見に反し

て、類似他者との社会的比較は成人期で年齢とともに減少することなく、各年代において同程度に最も利用される基準であることが注目される。また、女子よりも男子に多い傾向も認められた。年齢が類似した他者との比較が、このように成人や男性等の現行の社会システムへの関与が高いと考えられる層に多いことは、わが国の社会では類似他者との比較への圧力が高いことを示唆する。

類似他者との社会的比較をもたらす動機は、必ずしも自己概念の不確実さの解消を目指すものばかりではない。他者との相互交渉過程において適切とされる行動の遂行や、他者との良好な関係の維持を目的とする動機もあることが指摘されている(Frey & Ruble, 1985)。成人では自己概念の不確実さが相対的に少ないと仮定すれば⁷、日本社会における類似他者との社会的比較への圧力は、適切な行為遂行や関係維持の動機にも裏づけられたものであると考えられる。日本人大学生の社会的比較の頻度の高さの背景には、現行の社会システムに優勢なそのような動機を反映する部分がある、と考えることもできよう。

もとより現段階においては、これらの可能性は結果に即した1つの仮定に過ぎない。日本人青年の自己概念形成における社会的比較の相対的位置について、他の様式との相互関係や他者との類似性の意味内容を明らかにするなかで、上述の諸仮定を青年期全体を対象として実証的に検討することが今後の課題である。

引用文献

- Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. *Psychological Review*, 84, 485—503.
- Ausbel, D.P., Montemayor, R., & Svojiar, P.N. 1977 *Theory and problems of adolescent development*. 2nd ed. New York ; Grune & Stratton.
- Bem, D. J. 1972 Self-persuasion theory. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol.6. New York ; Academic Press. Pp. 1—62.
- Cooley, C.H. 1902 *Human nature and social order*. New York ; Chales Scribner's Son.
- 土居健郎 1969 「甘え」の構造 弘文堂
- Duval, S. & Wickland, R.A. 1972 *A theory of*

⁶ 各側面に含まれる2項目の平均値を自己評価とした。また、性差の有意な主効果も知性、性的能力、生き方、趣味特技、運動能力の側面と能力一般でみられた($F(1,325)=6.00 \sim 30.87$ $p<.05 \sim .0001$)。これらの側面では一般に女子は男子よりも自己評価が低い。

⁷ 研究Iの自己評価に関する資料によれば、成人は青年に比べて真面目さ、優しさ、性的能力、生き方の側面での自己評価が有意に高い($F(7,563)=2.63 \sim 14.02$ $p<.05 \sim .0001$)。

- objective self awareness*. New York ; Academic Press.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117—140.
- Frey, K.S. & Ruble, D.N. 1985 What children say when the teacher is not around : Conflicting goals in social comparison and performance assessment in the classroom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 550—562.
- 浜口恵俊 1977 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社
- 林 春男・白井泰子・高田利武 1981 認知的不協和理論の変遷 (I) — 「不十分な正当化の心理的効果」に関する実験的知見の総覧に基づく検討 — 実験社会心理学研究, 20, 155—170.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフNo14
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224—253.
- Marsh, H.W. 1989 Age and sex effects in multiple demensions of self-concept : Preadolscence to early adulthood. *Journal of Educational Psychology*, 81, 417—430.
- Mead, G.H. 1934 *Mind, self, and society*. Chicago ; University of Chicago Press.
- Mettee, D.R. & Smith, G. 1977 Social comparison and interpersonal attraction ; The case for dissimilarity. In J.M. Suls & R.L. Miller (Eds.) *Social comparison processes*. Washington ; Hemisphere. Pp.69—101.
- 南 博 1983 日本的自我 岩波書店
- Montemayor, R. & Eisen, M. 1977 The development of self-conception from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314—319.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York ; Basic Books.
- Schoeneman, T.J. 1981 Reports of the source of self-knowledge. *Journal of Personality*, 49, 284—294.
- Schoeneman, T. J., Tabor, L.E., & Nash, D.L. 1983 Children's reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 52, 124—137.
- Suls, J. & Mullen, B. 1982 From the cradle to the grave ; Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Suls (Ed.) *Psychological perspectives on the self*. Vol.1. Hillsdale ; Lawrence Erlbaum Associates. Pp.97—125.
- Suls, J. 1986 Comparison processes in relative deprivation : A life-span analysis. In M. Olson, C.P. Herman, & M.P. Zanna (Eds.) *Relative deprivation and social comparison*. Hillsdale ; Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 95—116.
- 高田利武 1985 青年期の自己批判・自己受容傾向と社会的比較行動 —社会的比較過程の発達の考察 (2)— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 35, 299—314.
- 高田利武 1991 社会的比較 —その発達過程— 三隅二不二・木下富雄(編) 現代社会心理学の発展 II ナカニシヤ出版 Pp.96—119.
- 高田利武 1992 独立的・相互依存的自己と自尊感情 および社会的比較 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 109—110.
- 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 1987 自己形成の心理学 —青年期のアイデンティティとその障害— 川島書店
- White, R.W. 1959 Motivation reconsidered : The concept of competence. *Psychological Review*, 66, 297—333.
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究 —20 答法での自己記述を手がかりとして— 心理学研究, 60, 245—252.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64—68.

付 記

本稿研究IIは、著者が群馬大学教育学部在籍時に文部省在外研究員として University of California, Los Angeles に滞在中に行われたものである。また、研究IIIは日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会で一部を発表した。調査実施にあたり多大の援助をいただいた Harold Gerard 教授に心から感謝するとともに、資料収集でお世話になった早稲田大学・橋本仁司教授と清心幼稚園・黒田とめ子園長に感謝の意を表します。

(1993.3.22受稿, 5.13受理)